

気がつけばもう春。そして総会に向けての苦悶の季節が通り過ぎ、初夏から盛夏へと、駆け足の日々が季節感を奪っていく。春といえば「センバツ」。今年は、わが居住地域の「浦和学院」が初の全国制覇を成し遂げた。各地から有望選手が集まる野球校として全国にも名を馳せている同校だが、夏休みの度に近隣の中学校を集め、ミニ大会を開く。各校担当を部員が分担して、リーグ戦を通じて中・高生の野球交流が行われる。私もこの大会に2年関わり、「地域貢献」に熱心な高校野球を目の当たりにした。ほとんどの中学生が進学してこない（そんな有望選手はいない）にもかかわらず、である。それでも、地元の学校という一体感は薄い。私立公立の違いを超えて、その生徒たちの育ちを見守ってきた地域や大人ではないからだろう。「学校」という組織ではなく、そこに通う「人間」との結びつきが積み重ねられて初めて、高校野球も地域に根ざすのだろう。高校野球の指導者を夢見た若かりし頃の夢が去来する。

前号で、生活困窮者を支援する新しい法制度のことを記した。その中で、「中間的就労」「社会的企業」といった機能やあり方も示されている。しかし、現実の困難を抱える人々へ押し寄せているのは、人材派遣会社を通じた自立支援・就労支援の波だ。埼玉県「アスポーツ事業」から本格化したワーカーズコープの「生活保護受給者」の自立支援は、20地域に広がる一方で、人材

派遣会社との競争にさらされ、敗北するケースも目立ってきた。そこにあるのは、当事者の経過や現状、そして未来を見据えた支援ではなく、即効性の高い「就職率」を上げることのみに目的が特化されていく傾向だ。しかし、一度は就職したとしても、「人材派遣」という枠組みでの労働は、人間性を奪われ傷ついた人々にとって、どんな意味を持つのか。その多くが、再び傷つき、以前にも増して困難を増幅させ戻ってくる現実を、たくさん見てきた。これは若者サポートステーションでも同様だ。単なる「就職支援」から、共に生きていくコミュニティをつくり、その中に役割としての仕事を生み出す支援こそが、時間を費やしたとしても確実かつ本質に適っていることを、今一度強調していかなければならない。これは、まぎれもなく尊厳をかけた「闘い」である。

地域に無数のコミュニティが形成され、人々がその中で居場所を得て、役割を実感できる社会をめざそうとした時、それを歪め壊すあらゆるものと、対決しなければならない。高校野球もまた、目先の勝利の前に、卒業後に広がる球児たちの、野球を超えた社会との接点、社会の中の役割を見据えて、日々の汗と涙を意味ある希望に結んで欲しい。その意味で、主人公の球児たちに立ちほだかる、大人たちの都合や思惑を超える、自治的な学校の登場が望まれる。そんな学校なら、一度は捨てた夢を磨き直すのも、悪くはない。